

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

夏休みが終わり、二学期が始まった。

カッチャン軍団でも学校でも「不思議な話」が流行っていた。

僕自身は『世界の不思議』に出てくる巨大ウミヘビとかアフリカ奥地の怪獣なんかが好きだったが、残念ながらみんな遠くにいるものばかりだ。

その点、UFO（宇宙人）や幽霊はどこにでも出現する可能性がある。

宇宙人ものでは、「FBI（アメリカの調査機関）に捕らえられた金星人」という写真が有名だった。やせた裸の小学生みたいな金星人の手を二人の大きなアメリカ人が上からつかんでいる。

それを真似して、カッチャンと僕がユーリンを捕まえて「金星人だ！」とやった。ユーリンは両手をつかまれたまま足をばたばたさせて、「ぼく、金星人なんてイヤだよ」と言うが、わりと嬉しそうだ。

金星人ごっこは単なる遊びだが、ある日僕は自分のところに宇宙人が来ていることを確信した。いつも筆箱に入れて学校に持っていく消しゴムに、まるでトタン屋根の断面のような波型の切れ込みが入っているのに気づいたのだ。ふつうにナイフで切ったらこうはならない。

世界には現代の科学でも解明できない謎がたくさんある。古代に宇宙人が来て文明を残していったのだという本を読んでいたから、僕の消しゴムもそうじゃないかと考えた。

この頃僕は『世界の不思議』のほかに、シャーロック・ホームズも愛読していた。ホームズに習ったのは、「観察と推理」である。ホームズの推理は直感ではない。よく見て、いちばん理屈に合う答えを探すというもののなのだ。

だから消しゴムだけで即「宇宙人の仕業」説には飛びつかなかった。一つなら偶然ということもありうる。でも、物置にしまっておいたカラーボールにも同じ波型の切れ込みを見つけたときには興奮した。

現代の科学で説明できないものが、たまたま二つ僕のところにあるわけがない。合理的な答えはただ一つ。

「宇宙人がうちに来ている」

それしかない。

台所で夕飯を作っているお母さんにそう言ったら、菜っ葉をザルでシャッシャとゆすぎながら、

「そんなの誰か友だちが彫刻刀なんかでいたずらしたんでしょ」とあつさり片付けた。

「でも、わざわざそんなことする友だちなんかないよ」わからずやのお母さんに反論したら、

「わざわざそんなことする宇宙人なんかもつとないわよ」と **A** で笑われた。

グーのネも出ない。

「バカなこと言っていないで宿題やりなさい」

お母さんはそうきつぱり言って、菜っ葉をざくざくと切り始めた。まるで宇宙人より菜っ葉のほうが大事みたいな手際のよさでますます面白くない。

「僕もね、この前UFOを見たよ」台所のテーブルに一緒にスワっていた弟のユーリンが言い出した。僕はその話をもう何度も聞いていたけど、お母さんは初めてらしい。

「何かオレンジ色でぼーっと光る火の玉みたいなものがユドノ（川の）上のほうを飛んでたよ。上にすーっと上がった、下にすーっと落ちたりして、急に消えちゃった」

② 「飛行機なんかだろ？」イライラして水を差してみた。

「ちがうよ。飛行機はあんなふうに飛ばないよ。だいたい、全部が光ったりしないじゃん」

ユーリンはムキになって言い返した。

絶対星か何かを見間違えたんだ。まったくバカなやつだ。

お母さんがまた笑うだろうと思ったら、

「そういえばお母さんも火の玉、見たことがあるよ」と言い出すので驚いた。
昔、まだ山梨の実家に住んでいたとき、夕方近所の人や家族と一緒にお寺の掃除をしていたら、墓地の上に大きな赤い火の玉が
ゆらゆら飛んでいたのだという。

「それ、UFOじゃなくて霊じゃないの？」ユーリンが生意気なことを言った。

「そうね。あれは死んだ人の魂かもしれないね」

えー、どうしてお母さんとユーリンは不思議なものについてちゃんと話をしてるのだ。僕だけ除け者みたいじゃないか。

僕も何か不思議なものを見たい。意地でも見たい……。

そんなことばかり考えていた。

それから数日後、僕は夕暮れ時、学校から家の方に向かって一人で歩いていた。

いつもなら遅くても三時には家に帰るのに、こんな時間になってしまったのは、文化祭実行委員会に出ていたからだ。

不思議といえば、僕が文化祭実行委員なんてやっていること自体が、UFOの飛来より不思議なことだった。

三年生まで、僕はとにかくおとなしくて目立たない子どもだった。野球やドッジボールもそんなにうまくないし、かといって、
めちやくちや³やヘタなわけでもない。学校の成績は、3と4がまだらになった感じ。通知表には担任の先生から「もう少しセツキョ⁴
ク性がほしい」とか「まじめすぎる」と書かれた。クラスの友だちからも、いい意味でも悪い意味でも注目されることはなかつた。

それが四年生になって変わった。理由はひとえにカッチャン軍団に参加し、妙な活動を繰り広げたせいである。またやぶけの
探検（カッチャン軍団が）もそうだけど、いちやくクラスで有名になったのは例の鉄橋復しゅう事件だ。ストのとき
（鉄道会社のストライキにより）鉄橋を渡ろうとしてカッチャンが捕まり、僕らも先生に叱られた。それだけでも問題なのに、さらに
「復しゅう」と称して、鉄橋の橋げたに穴を空けた。

僕はその話をクラスの友だちにただでなく、赤錆びた犬釘（レールを固定する）をわら半紙にくるんで学校に持って行き、
みんなの前で机の上にゴロンと転がした。

そのときのクラスの連中の驚いた顔が忘れられない。みんな、犬釘自体見たことがなかったらしい。まるで殺人事件の凶器を
見るように、目を真丸くして犬釘を見ていた。クラスの大多数は「町」である子安町の住人だから、なおさらだ。

③以来、僕は「ちよつと変わったやつ」と思われるようになった。その後、休み時間にカッチャン軍団での数々の冒険や探検の話
をしたり、作文に書いたりした。

僕の冒険や探検を大げさに言いふらすやつもいた。マサトだ。八幡様（神社）と一緒にノコ（ノコギリ）を捕りに行ってから、
マサトとは仲良しになっていた。

マサトは最初会ったときは無口で何を考えているのかわからないように見えたが、それは転校したてでクラスにとけ込んでな
かっただけだった。今は子安の少年野球チーム「子安イーグルス」に入り、その並外れたパワーで四年生の中心的存在になってい
た。どこか素朴で、ちよつとしたことにすぐ驚いたり感動したりして、しかもそれをみんなに言って回る癖があった。

マサトは僕らの冒険・探検話が大好きで、「この前、ユドノを片倉城址の向こうまで遡ってウグイ（魚）を捕ったぜ」なん
て話も「すっげー！」と歓声をあげ、「おい、阪野がさ、またすげえこと、やったんだぜー」とまわりの子に話して聞かせるの
だった。

おかげで、僕は「ちよつと変なやつ」から「かなり変なやつ」に格上げだか格下げだかわからないが、とにかくそう思われるよ
うになった。僕もみんなを驚かせることが楽しくなり、ますますカッチャン軍団でムチャなことをやるようになった。

だが、さすがに文化祭実行委員に選ばれたのにはびっくりした。うちの学校では十月に文化祭をやる。各クラスから男女二名が
委員になり、クラスで何をやるのか、学年全体では何をやるのか、先生もまじえて集まって相談する。

勉強ができる子が選ばれる学級委員とちがうが、こちらは休み時間にクラスのリーダーとして遊びを仕切るような子が選ばれ
る。

正直なところ、委員を選ぶときにマサトが「阪野君がいいと思います」と推薦し、その確信にミチた大声に他のみんなが圧倒されて、なんとなく決まってしまったのだが、それにしても驚きだ。

いちばんびっくりしたのはお母さんで、「おまえ、今度は何をしたの？」と言ったが、その口調はいつもの心配性^{しんぱいせい}とちがつて、少し嬉しそうだつた。

さて、委員会では、僕は「宇宙西遊記^{さいゆうき}」という劇をやることを提案した。三蔵法師^{さんそうほうし}や孫悟空^{そんごくわう}の一行がUFOに乗って宇宙のどこかにあるガンダーラ星⁶をメザすという、『宇宙戦艦ヤマト』と『西遊記』を足して二で割ったような話だ。

男子はだいたい「面白い」と言ってくれたが、女子には「くだらない」とフヒョウ⁷だった。議論になったが、口では男子は女子に勝てない。特にうちのクラスの女子の委員である坂口が先生に向かって「テレビの真似はよくないと思います」と発言し、それが命取りになった。

坂口は体がなくてガサツな女子だ。相棒の古田という子とよくコンビを組んでおり、「オトコンナズ」と呼ばれていた。なぜ、そんなあだ名がついたかというところ……。

まあ、いい。あんなむかつくやつらのあだ名の説明なんか。とにかく連中は最近、僕を目の仇^{かたき}にしており、何かとケチをつける。そんなやつは前はいなかった。クラスで目立つと敵も出てくるのだ。

というわけで、僕は「くそつ、なんか面白くねえな」とつぶやきながら、家への道をとぼとぼ歩いてた。

雨がしょぼしょぼ⁸降り、空は薄暗^{うすくら}かった。車一台がやっと通れる細い道を抜けると、少し幅^はの広い場所に出る。ここはお父さんが子どものときには七日に一度市が立っていたとかで「七日市場」なんて呼ばれている。

七日市場を通って京王線^{けいおうせん}のガード下である「こぐり」にさしかかった。ここは寂^{さび}しい場所だ。こぐりをくぐる手前に色あせた赤い前掛け^{まえかけ}をつけたお地藏さんがある。お地藏さんの前にはなぜか大きな木が丸太のように転がっている。もう朽^くちてボロボロだ。もつとも僕たちは前にその朽ちた木をほじくりかえして、冬眠^{とうみん}中のクワガタを見つけたことがある。それを家に持って帰ったから、物知りのお父さんは「今日は啓蟄^{けいちつ}だ。虫が起きる日に虫を捕まえてきたか」と喜んだ。

道の下は佐々木鉄工所の資材置き場で、資材なのかゴミなのかわからない錆びた鉄の棒や部品が放置されていた。ここも僕たちカッチャン軍団の資材調達場だったが、一人で来ると薄気味悪い感じがする。

そしてこぐりのすぐ手前には前は美容院だった空き家があった。今でも壊れたカンバン⁹がそのまま、につこり微笑^{ほほえ}んだ女の人が微笑んだまま顔が半分¹⁰に割れている。

僕がこぐりにさしかかろうとすると、前から車が走ってきた。ヘッドライトに白いぼんやりしたものが浮^うかんだような気がした。ちようどこぐりの中だ。車が通り過ぎると、その白いものは消えた。僕が近寄ってみても、何もない。

あれはなんだったんだろう？ 白っぽいものが浮かび上がった気がしたけど……。

こぐりは白いコンクリートでできているが、雨がしみてところどころ黒ずんでまだらになっていた。そこに車の光があたっただけかもしれない。もし、何か変なものが実際にあったとしても、ただ白っぽいものとかいえない。

どうしよう、としばし考えた。「白っぽいもの」ではあまり面白くない。僕は、カッチャンならどうするだろうと思った。最近、僕の行動の基準はカッチャンである。

カッチャンは無理でも自分のやりたいことを押し通す。「面白ければいいんだ」と言うにちがいない。

「よし」僕は決心した。「あの白っぽいものは女の人だったんだ。白いコートを着た女の人。それが車が通り過ぎた直後、すっと消えてしまった。そういうことにしよう！」

そう自分に言い聞かせると、なんだか本当に女の人を見たような気がしてきた。ついに僕も不思議体験だ。怖いような、ワクワクするようなこの気分を誰かに伝えたい。思わず、走り出していた。

けれど、うちに帰ってもお母さんやユーリンにはその話はできなかった。宇宙人のいたずら事件でバカにされたばかりだったから、また幽霊話をしても信じてもらえないような気がしたのだ。

言ったのは学校の教室である。

僕が仲のいい友だち数人に話すと、みんなは「え、うそお？ こえー！」とのけぞった。僕たち又木の人間にとってはこぐりは毎日通っているところだが、子安の子どもたちにとってはちがう。あの小さくて暗いトンネルとその周辺は相当不気味に思えるのだ。僕はそれをよく知っていた。だから、まず学校の友だちに話したわけだ。

⑥ まず、仲のよいマサトに話すと、「え、あそこ？ ホントかよ！」と興奮していた。

「おい、阪野がさ、すげえもん、見たってよ！」とクラス中にふれまわった。僕が想像したとおりだ。でもみんながマサトのように素直なわけじゃない。

「あんなとこに幽霊が出るか」と言っただのは、斉藤という子安三丁目の男子だった。学級委員をやっていて、頭がいい。

「幽霊っていうのはさ、誰か恨みをもって死んだ人の霊なんだぜ。だからその人が死んだところとか、その人の家とか、そういうところに出るんだ」

「……………」僕は黙った。斉藤は追い討ちをかけた。

「あそこは毎日、あんなにたくさん人が通ってるじゃん。なのに、今まで全然そんな話が出てないんだぜ。おかしいよ」

斉藤の意見はむかつくことにスジがよく通っていたから、他の連中も「そう言われればそうだな」とBをひねり出した。

僕は又木の子だし、最近「変なやつ」になっている。犬釘とか巨大ノコとか物的証拠を持っていったりマサトみたいな証人がいればともかく、僕一人の話だけでは信憑性(信用できる度合い)がないらしい。

「おめえさ、車のライトに影かなんかウツつたのを見間違えただけじゃねえのか？」ドスのきいた声でオトコンナズの坂口が言い放った。僕はギクツとした。

「おめえはビビりだからな、なんでも幽霊に見えるんじゃないか」坂口はとどめをさすように言い、相棒の古田が「ガハハハ」と勢いよく笑った。

「みんなが見てなくても、阪野には見えるってことはあるだろう」と純情なマサトが味方についてくれたが、それも逆コウ力¹²だった。斉藤は笑い飛ばした。

「じゃあ、阪野が霊能者ってこと？ 阪野、おまえ、今まで何度も幽霊を見てるのかよ？ そんな話、一回も聞いたことないけどな」

「霊なんか何度も見てるよ！」と言いたかったが、本質的にまじめで気弱な性格は直っていない。僕はCを尖らせたまま黙り込んだ。

すでに教室の雰囲気は一気に斉藤とオトコンナズの側に傾いた。そのとき、救世主が現れた。

「あたしは阪野君のことを信じるな」と長谷川真理が言ったのだ。

「あたしのおじいちゃんに聞いたんだけど、昔あそこで若い女の人が交通事故で亡くなったんだって。それであのお地蔵さんをつくったんだって」

「おお……」とクラスの連中はどよめいた。長谷川は又木の子だが、誰とも別け隔てなく接する気さくな人柄で、男子からも女子からも人気がある。僕なんかとは桁違いに信頼されている。

しかも彼女はこぐりのすぐそばに住んでいて、そのおじいちゃんが言っているというのだ。僕だって、「えーっ」とのけぞった。あの地蔵の前の木をほじくりかえしてクワガタを捕ったりしていたからだ。知っていたら、そんな祟りが起きそうなことはない。

長谷川の強力な援護射撃で勝負はあっさり逆転、僕が勝ちをおさめた。話はあつという間にクラス中に広まったどころか、他のクラスにまで飛び火した。

「それ、ほんと？」と僕のところに直接やってくるやつもけっこういる。

人気者になったようで嬉しい。それに、何回も何回も繰り返し話しているうちに、自分がそれを見たことを確信するようになってきた。その女の人が着ていたコートの縫い目まではつきり目に浮かぶのだ。

だが中には、「阪野、ウソ言ってるんじゃないか」と疑うやつもいる。そんなときにはギクツとした。一瞬にして、女の人^⑦がぼわっとかすむ。

「ウソじゃねえよ、ほんとだよ！」僕が気色ばむとマサトが加勢してくれる。

「そうだよ、阪野がウソ言うわけねえだろ！ 阪野はそんなやつじゃねえよ」

マサトはいいやつだ。それが今はなんだか重い……。

いや、僕が何か見たのはほんとうだ。でもそれが女の人だったのかどうかなると自信がない。なにより肝心の部分が「ダメ」だった。

怖くないのだ。もし僕がほんとうにそれを見た、あるいは見てないにしても「何か感じた」のなら怖いはずだ。僕は人一倍怖がりなのだ。でも怖くない。つまりそれは、見た見ないを超えて、「ほんとうじゃない」のだ。

こぐりのところを通るのが億劫になった。自分がウソをついたのを毎回思い出すからだ。一人のときはこつそり遠回りして、「いっけん」の森を通って家に帰った。ところがそれを見ていた子がいたらしい。

「阪野はあの幽霊の場所が怖くて、一人のときはすごく遠回りしてるぜ」なんていう話が広まって、ますます話が本物っぽくなっ

てしまった。

僕はその幽霊話をしてくれとせがまれても、「思ひ出したくないんだ」と正直に言ったが、それもまた同じ結果になった。

そうこうするうちに、わざわざ「こぐり」まで出かける連中が現れ、しかも「俺もあそこで幽霊見た」「あたしも見た」という子が続出するようになった。

ウソつけ、みんな注目をアビ¹³たいだけだろ！ と思ったが、もちろん何も言えない。僕のせいで、あろうことか、学年中に幽霊ブームが起こってしまった。

しまいには先生が「道徳」の時間に「オバケを見たとか、そういうデマを流すのはやめなさい」と言った。

僕は「デマ」という言葉にショックを受けた。ウソよりもっと性質の悪い、ハンザイ¹⁴じみた臭^{にお}いがしたのだ。もともとまじめでウソなんか嫌いな性格だった。それだけじゃない。

カッチャンならどうするかと考えて、「白いコートの女の人を見た」と無理に言い張ったが、よくよく考えると、カッチャンは同じ無理をするにしても、自分が信じていないことは言わないし、やらない。

まわりから見れば「どうかしてる」ということでも、カッチャン本人は心の底から信じてやっている。ウソとか何かをする「ふり」はカッチャンが最も嫌うものだ。

カッチャンは僕がウソをついたと知ったら、軽蔑^{けいべつ}するだろうな……。

そう思うと、とめどもなく気がめい^{めい}った。カッチャンがその頃、宇宙人に熱中^{ねつちゅう}していて、幽霊話にまったく関心を寄せなかったのがせめてもの救いだった。

先生の注意で、幽霊ブームは一段落ついた。幽霊話が多すぎて、みんな飽きてきたところでもあった。

僕はやっと心穏やかな気分になって、図書館に行き、『日本の伝説』を読んでいた。もともと僕はこういう伝説、民話、昔話の類いがすごく好きだった。化け物や怪物もよく出てくるし、なによりも物語が面白い。そして、性懲りもなく、文化祭の劇で使える話はないかと物色していた。

ところが、本を読んでいるうちに、「弁天様が白い蛇^{へび}になって現れ、池の中を泳いでいく」という物語を見つけて仰天した。僕は何ヶ月か前、カッチャン軍団の仲間たちと又木弁天という神社に遊びに行った。そのとき、たまたま僕一人、みんなからちよつと遅れて歩いていたとき、神社脇^{わき}の池で、真っ白い蛇が首だけ水面に出して、するするすつと社のほうに泳いでいき、すつと姿を消したのを目撃したのだ。

真っ白の蛇なんて初めて見た。でも蛇にはいろいろな種類があるから、変だとも思わなかった。「あー、蛇は泳ぎがうまいんだなあ」と単純に感心しただけで、わざわざカッチャン隊長にホウコク¹⁵もしなかった。

「あれは、弁天様の化身^{けしん}だったのか!？」

僕はすごいものを見てしまったのだ。興奮して、誰かに話したくなった。でも、この前、幽霊を見たときデマを流して、先生に注意されたばかりだ。それに弁天様の化身なんて、たぶんわかってもらえないだろう。

結局、学校では誰にも言わなかった。カッチャンにも言えない。幽霊話の件でどこか後ろめたかったし、カッチャンは今超能力に凝っているから聞く耳をもたないだろう。

しかたなく、お母さんに言ってみたが、「おまえも宇宙人が来たり、弁天様が来たり、人気者だねえ」と笑われただけだった。どうしてこうなるんだ！

⑩ しかたなく、居間で『三冠王 王貞治物語』を熱心に読んでいるユーリンをつかまえ、話して聞かせた。

「あれは絶対に弁天様の化身だったんだ」僕は弟に強く言った。わかったのかどうか知らないが、ユーリンは神妙にうなずいていた。

(高野秀行「またやぶけの夕焼け」)

問1 線部1～15のカタカナの部分を書きなさい。

問2

A
C

 に当てはまる、体の一部を表す漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問3 線部①「僕は自分のところに宇宙人が来ていることを確信した(2ページ)とありますが、なぜ「僕」はそうに「確信」したのですか。七十字以内で説明しなさい。

問4 線部②「『飛行機かなんかだろ?』イライラして水を差してみた(3ページ)とありますが、この時の「僕」の気持ちの説明として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分がいつも見下している弟の話をお母さんが本気で信じているようなので、あせりといらだちを感じている。
 イ わかりきったウソの話を「僕」に何度も聞かせた上、お母さんにもそれを話そうとする弟に怒りを覚えている。
 ウ 自分の話でさえお母さんに取り合ってもらえないのに、信じてもらえるはずもない話をする弟に腹を立てている。
 エ お母さんに全く相手にされなかったことが悔しくて、腹立ちまぎれに弟を言い負かしてやろうと思っている。
 オ みんなにバカにされている弟なのに、自分よりも不思議な体験をしているということに驚きと嫉妬を感じている。

問5 線部③「以来、僕は『ちょっと変わったやつ』と思われるようになった(5ページ)とありますが、それ以前の「僕」を説明した部分を本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問6 線部④「それが命取りになった(6ページ)とはどういうことですか。四十字以内で説明しなさい。

問7 線部⑤「思わず、走り出していた(7ページ)とありますが、この時の「僕」の気持ちを三十五字以内で説明しなさい。

問8 線部⑥「まず仲のよいマサトに話す(8ページ)とありますが、「僕」がそのようにしたのはなぜですか。八十字以内で説明しなさい。

問9 — 線部⑦「女の人がぼわつとかすむ」(9ページ)とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 周囲に自分の話をなかなかわかってもらえずに、悔しさで目に涙があふれてきたから。

イ 女の人服装までははつきり覚えていないことを相手に見すかされて、ひどく動揺したから。

ウ 女の人を見た時に怖いと思わなかったため、今ではその印象が薄れてきているから。

エ 女の人を見た時の恐怖が、一気によみがえってきて、その記憶を消し去りたいと思ったから。

オ 見たつもりになっていた女の人姿が、疑われることであやふやになってしまったから。

問10 — 線部⑧「気色ばむ」(10ページ)の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア むっとして表情を変える

イ かつとなつて大声を出す

ウ 腹を立ててやけになる

エ おびえて真っ青になる

オ 緊張して顔がこわばる

問11 — 線部⑨「『思い出したくないんだ』と正直に言ったが、それもまた同じ結果になった」(10ページ)とありますが、これはどういうことですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「僕」はウソをついたことを遠回しに伝えようと「思い出したくないんだ」と言っているが、周りの子どもはそんな

「僕」の思いに気づくことなく、ますます幽霊ブームで盛り上がるようになってしまったということ。

イ 「僕」は「こぐり」で体験した恐ろしさから「思い出したくないんだ」と言っているが、周りの子どもは「僕」がその場所を避けていることと合わせて、「僕」をますます臆病だと思つてバカにするようになったということ。

ウ 「僕」はカッチャンにバカにされないかという不安から「思い出したくないんだ」と言っているが、周りの子どもは「僕」が本当に幽霊体験におびえていると思ひ、ますます面白がつて話を広めるようになったということ。

エ 「僕」はウソをついた後ろめたさから「思い出したくないんだ」と言っているが、周りの子どもは「僕」が本当に「こぐり」での体験を怖がつていると思ひ、「僕」の話をますます信じるようになってしまったということ。

オ 「僕」はこれ以上ウソをつきたくないという思いから「思い出したくない」と言っているが、周りの子どもはウソがばれそうで苦しんでいる「僕」を困らせようと、ますますその話をするようになってしまったということ。

問12 — 線部⑩「『あれは絶対に弁天様の化身だったんだ』僕は弟に強く言った」(12ページ)とありますが、この時の「僕」の気持ちを八十字以上百字以内で説明しなさい。

問13

作品中で「僕」はカッチャンのことをどのように思っていますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「僕」に面白い体験をたくさんさせてくれる頼りがいのある存在であるが、何をするときにも「カッチャンならどうするだろう」と考えすぎたあまり、本来の気弱な自分では片付けられない事態におちいり、カッチャンの偉大さを感じる一方で、自分には手の届かない存在だと思ふようになった。

イ 「僕」を冒険や探検に導き、何か決断するときの基準となってくれる存在であり、初めは面白いことをただただ追求する一面をカッチャンに見ていたが、よく考えるとカッチャンは周囲を楽しませるためにそうしているのではなく、興味のあることにひたすら没頭するまっすぐな人間だと気づくようになった。

ウ 「僕」をさえない学校生活から抜け出させ、クラスの人気者にしてくれた尊敬すべき存在であり、いつも「僕」はカッチャンに気に入らねようががんばっていたが、厳格なカッチャンは「僕」がしたあやまちを決して許してくれないだろうと思ひ、かえってカッチャンの怖さにおびえるようになった。

エ 「僕」の心の中心にいつもいる魅力的な存在であり、「僕」に不思議な体験をたくさんさせてくれるので、「僕」はカッチャンのようになりたいと努力していたが、カッチャンは周りのみんなに無関心で自分のやりたいことに集中してしまふため、寂しさがつり、カッチャンの薄情さを痛感するようになった。

オ 「僕」をいつも無茶なことに巻き込みながらも、危険なときは守ってくれる頼もしい存在であり、「僕」はそんなカッチャンにあこがれて自分もみんなにそう思われたいと願っていたが、カッチャンには「僕」のすることを全く認めてもらえなかつたため、カッチャンは身勝手な人物だと思ふようになった。

受 験 番 号	
国	語

11	6	1
12	7	2
13	8	3
14	9	4
15	10	5

A
B
C

[illegible]

1045

[illegible][illegible][illegible][illegible]

問 10

[illegible]

1001

【下書き用紙】

この用紙は自由に使ってかまいません。終わったら問題用紙とともに持ち帰ってください。

A blank sheet of graph paper featuring a uniform grid of small squares. The grid consists of 20 columns and 30 rows. A single vertical line runs down the center, separating the first 10 columns from the last 10 columns. The entire grid is enclosed within a rectangular border.

(二十字×十行)

[illegible]

(二十字×十行)